

北九州市立大学

外国語学部紀要

第 147 号

2018年 3 月

目 次

【論文】

プロジェクト学習を通じた学生のアクティブラーニングに対する意識調査分析

… 西 香 織 ・ 李 大 年 … 19

北九州市立大学

BULLETIN

FACULTY OF FOREIGN STUDIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU

No. 147

March 2018

CONTENTS

〈Articles〉

Students' Perceptions of Active Learning after a Project-Based Learning
(PBL) Experience

… Kaori Nishi / Danian Li … 19

THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU

Kitakyushu, Japan

プロジェクト学習を通じた学生の アクティブラーニングに対する意識調査分析

西 香 織 ・ 李 大 年

平成29（2017）年度2学期に北九州市立大学において通称「KitaQプロジェクト2017」を実施した。参加学生が協働作業に対して苦手意識、負担感、拒否感を抱いている傾向が見られたことから、今後の活動内容を改善するために、プロジェクト終了後にアクティブラーニングと今回のプロジェクトに対する意識調査を行った。本稿はその結果を分析考察したものである。

1. プロジェクトの背景と概要

北九州市立大学外国語学部中国学科1年生の必修科目「中国語初級総合Ⅱ」は各クラス、担当教員（中国語母語話者+日本語母語話者）2名が週4回、リレー形式で講義を行っている。そのうちの1クラス（今年度担当教員：西香織・李大年）では、毎年度、中国語を用いて調査を行い、成果物として日中対訳型のスライドを作成してクラス内で発表、相互に評価を行った後、他大学の他語学クラスと成果物を共有し鑑賞するというプロジェクト学習を導入している。

本プロジェクト学習は、『外国語教育のめやす』（公益財団法人国際文化フォーラム、2013、以下、『めやす』）のマスターを養成する研修「2013年度めやすマスター研修」に参加した阪堂千津子氏（韓国語、武蔵大学他非常勤講師）、池谷尚美氏（ドイツ語、横浜市立大学他非常勤講師）と西香織

プロジェクト学習を通じた学生の
アクティブラーニングに対する意識調査分析

(中国語、北九州市立大学外国語学部准教授)の3名の語学担当教員が毎年度、共同で考案し、実施している韓国語・ドイツ語・中国語連繫プロジェクトの一環である。

『めやす』は21世紀を生き抜くグローバル人材としての素質や能力を育てるための外国語学習のめやすであり、21世紀はグローバル社会が必要とする「21世紀型スキル」(『めやす』では、高度思考、協働、情報活用の3つのスキルから構成)や、「グローバル社会に参画して社会をつくっていく力」を身につけることが必須であることから、「3領域×3能力+3連繫」を学習目標のキーコンセプトとしている。「3領域」は言語、文化、グローバル社会、「3能力」はわかる、できる、つながるを指し、「3連繫」は「関心・意欲・態度／学習スタイル」との連繫、「既習内容・経験／他教科の内容」との連繫、「教室の外の人・モノ・情報」との連繫を指す。

本プロジェクト学習においても、『めやす』のキーコンセプトとのゆるやかなつながりの中で、「高度思考」「協働(グループワーク)」「情報活用」「つながり(学校間交流、目標言語の母語話者との交流)」をプロジェクトの中心に据えており、平成25(2013)年度より、異なる大学、異なる専攻、異なる語学(韓国語、ドイツ語、中国語)クラスにおいて¹、同様のテーマでプロジェクトを実施し、ウェブ上で成果物を共有、評価し合うなどしている。ただし、コマ数やカリキュラム、クラスの規模、専攻・非専攻の違いから、学生の語学力やプロジェクトに割くことのできる時間なども大きく異なるため、具体的な活動内容や進め方などについては、それぞれのクラスの条件に合ったものを各クラスの担当教員が考え、適宜、アダプテーションを行って実施するようにし、本連繫プロジェクトの実施が各語学クラスの授業進行の手枷、足枷とならないようにしている。本連繫プロジェクト

¹ 平成25(2013)年度のみ他大学の日本語クラスでも実施した。

は、対外的には、いかなる語学クラスにおいても適用可能なプロジェクトのアダプテーションの例を示すこと、21世紀型の学校間交流のモデルを示すことを目的としている。また、学習者に対しては、目標言語の母語話者を対象とした主体的な調査を実施することで、目標言語圏の人々の考えや行動パターンなどを理解し、その結果（情報）を、成果物を通して他の語学クラスの学習者に分かりやすく伝えることで、初級レベルであっても既にその目標言語の使用者であるということの自覚と自信を持たせ、さらに、クラス間で情報共有することで、より広い視野でもって物事を見る目を養うことが狙いである。同時に、情報収集や成果物の作成を通じて、学生のICTスキルを向上させることも目的の一つである。

北九州市立大学の対象クラスでは本プロジェクトを「KitaQプロジェクト」と称し、毎年度2学期に以下のテーマで実施している²。

第1回 平成25（2013）年度「日中大学生の消費行動比較」³

第2回 平成26（2014）年度「中国古今楽曲比較」⁴

第3回 平成27（2015）年度「街角中国語ワード・ウォッチング」⁵

第4回 平成29（2017）年度「平昌冬季オリンピック調査」⁶

² 平成28（2016）年度は事情により未実施。

³ KitaQプロジェクトについては、2013年12月8日に行われた「外国語学習のめやす マスター研修2013（冬）」にて活動案を発表し、また、他の大学や高校、語学クラスでも利用できるよう、公益財団法人国際文化フォーラム「めやすweb」にも活動案が掲載されている（2018年1月31日閲覧）。

<http://www.tjf.or.jp/meyasu/support/handai-A/nishikaori/post-11.php>
⁴ KitaQプロジェクトについては、西・胡（2015）及び西（2015）にて、連繋プロジェクトについては、西・阪堂・池谷（2015）にて発表している。

⁵ 連繋プロジェクトについては、阪堂・西・池谷（2016）にて発表し、また、他の大学や高校、語学クラスでも利用できるよう、公益財団法人国際文化フォーラム「めやすweb」にも活動案が掲載されている（2018年1月31日閲覧）。

<http://www.tjf.or.jp/meyasu/support/writer/cat941/post-83.php>

⁶ 連繋プロジェクトについては、池谷・阪堂・西（2018）にて発表している。

プロジェクト学習を通じた学生の アクティブラーニングに対する意識調査分析

第1回の連繫プロジェクトを例にとると、中国語クラスでは「日中の大学生の消費行動の比較を通して、文化の背景を理解し交流を図る」という目標のもと、以下の比較項目についてグループごとに調査を行った。

1. 日中大学生の家賃比較（住環境の調査を含む）
2. 日中大学生のランチの値段比較（昼食事情の調査を含む）
3. 日中大学生の携帯電話（スマートフォン）利用料比較
（よく使用するアプリや無料Wi-Fiの普及状況等の調査を含む）
4. 日中大学生のアルバイトの時給比較
（アルバイトをしている学生の割合や職種の調査を含む）
5. 日中大学学費比較
（奨学金や学費免除制度の有無等の調査を含む）

成果物として日中対訳型のスライドを作成し、クラス内で発表した後、WEB上で他の語学クラスと成果物を共有することで、参加学生は韓国語クラスやドイツ語クラスの調査結果を通して、北九州市立大学のみならず、東京など他の地域に住む大学生の消費行動について把握することができるほか、韓国やオーストリアの大学生の消費行動についても理解することができる。たとえば、「ランチ」であれば、成果物を通して、日本、中国、韓国、オーストリアの大学生の昼食事情（学食を利用するのかお弁当やパンを買うのか、自分でお弁当を作っていくのか、お弁当の中身には普段、何を入れるか、昼食にかける金額はいくらくらいか、その金額でその国や地域では何が買えるか等）を比較することが可能となり、より深い学びが得られるしくみである。

2. KitaQプロジェクト2017の概要と流れ

平成29（2017）年度の連繫プロジェクトのテーマは「平昌冬季オリンピック」であり、2018年2月に隣国、韓国で平昌冬季オリンピックが、また、

2020年には東京で夏季オリンピックが開催されることから、中国語圏の人々の（冬季）オリンピックやパラリンピックに対する関心度や、中国語圏の注目の選手、文化に関する理解を深めることで、オリンピックを身近に感じ、楽しむことを目的としている。

中国語クラスの受講者は20名で、2学期開講時にKitaQプロジェクト2017のテーマとスケジュールを伝えた。KitaQプロジェクトに関する情報やスケジュールのアナウンス、資料配付、情報共有は主に北九州市立大学の学習支援システムMoodleを利用し、学生がいつでも確認、参照できるようにした。プロジェクトの主な流れは以下のとおりである。

[表1] プロジェクトの流れ

10月	グループ分け（5グループ）、事前調べ グループ再編成（4グループ）、本テーマの決定
11月	情報収集、調査（アンケート等）の実施
12月	成果物（日中対訳型スライド）の完成、クラス内発表、評価 教員による成果物の中国語添削
1月	成果物の修正、他言語クラスと共有 他クラスの成果物の鑑賞とフィードバック（評価、コメント）

事前調べのテーマは以下の5種類であり、グループごとに話し合って決定した（1グループ4、5名）。

1. 平昌冬季オリンピック、パラリンピックの基本情報
2. 日本や中国語圏の国・地域を中心としたオリンピックの簡単な歴史
3. 冬季オリンピックの競技種目（日・中・英語対照）
4. 中国語でも知っておきたいオリンピック用語
5. 試合で使用される応援やプーイングの中国語表現

プロジェクト学習を通じた学生の
アクティブラーニングに対する意識調査分析

事前調べでは、必ず出典を明らかにすることを指示し、事前調べで得た結果はMoodle上で共有し、再度、グループ編成を行ってそれぞれ話し合いを進め、本テーマを以下の4種類に決定した（1グループ4～6名）。

1. 中国で有名な冬季オリンピック選手調査
2. 平昌オリンピックに対する関心度の日中比較
3. 中国人の冬季オリンピック競技種目に対する関心度調査
4. 中国がパラリンピックに強い理由と中国の障害者の現状調査

約6週間の時間をかけて、インターネットや書籍、雑誌などを用いて情報収集を行い、SNSやEメールなどを通じて、中国人や日本人を対象にインタビューやアンケート調査を行った。調査内容や調査のしかたについては、原則として全て学生（グループ）に任せ、教員は求められれば助言はするが、極力、介入しなかった。ただし、調査に使用する中国語については、教員が添削したり、教員がMoodle上に事前にアップロードしておいた「お役立ちページ」（調査やプレゼンテーションによく用いる中国語表現集⁷、関連ページのURL）を参照させるようにした。

成果物（日中対訳型スライド）は2017年12月19日までに完成させることとし、学生の授業時間外の負担が増えるのを避けるため、可能な限り、授業時間内にアクティブラーニング教室を利用するなどして成果物の作成やプレゼンテーションの準備を行う時間を確保した。12月20日にクラス内で発表会を開き（発表演語は日本語）、相互評価を行った。

大まかな評価基準については、プロジェクト開始と同時に参加学生に通知し、ルーブリック（詳細な評価方法）は発表の2週間前に学生に配付して、各グループが評価基準に従って成果物を完成させられるようにした。評価者はプロジェクトに参加した全ての学生（自己評価を含む）と授業担当教

⁷ できるだけ授業で使用している中国語教材の学習内容と結びつけ、既習の文型や表現を使用することを心がけた。

員2名である（中国語に対する評価は教員のみが行った）。評価項目の1つである「高度思考力」については、「大学生らしいテーマ・内容」と記載し、あえて具体例は挙げず、学生自身に考えさせるようにした。

成果物（スライド）は、クラス内で発表した後、教員が中国語添削を行って各グループに返却し、各グループで修正を行った後、グループリーダーが3語学クラスで情報を共有するために開設したグループウェア（サイボウズLive）のフォルダにアップロードし、他の語学クラスに向けて調査内容の紹介コメントを送信した。2018年1月18日、授業中に韓国語クラスとドイツ語クラスの成果物（スライドや発表時のビデオ）を鑑賞し、評価表を用いて評価を行い、感想を書いて2クラスへ送った。

3. KitaQプロジェクト2017で生じた問題

本連繫プロジェクトに参加した中国語クラスでは、通常の授業においても、毎課、小規模なペアワークやグループワークを行っており、1学期には市内の中華料理店で中国人店員の協力のもと、注文タスクを行ったり、中国や台湾の大学（主に北九州市立大学の協定校である中国の大連外国語大学や台湾の文藻外語大学）教員や学生の協力のもと、授業中に無料ビデオ通話サービスSkypeを通じて、対面で自己紹介をし合ったり、互いのことを尋ね合ったりするタスクや、EメールまたはSNSでメッセージを送って自己紹介や自身の趣味、日本の気候を紹介するタスクなど、実践的な中国語のコミュニケーションタスクも多く導入しているため、参加学生は抵抗なくプロジェクトに取り組めるだろうと想定していた。事実、今年度、各グループから提出された成果物はどれも一見、完成度が高く、発表も工夫が凝らされており、ただ得られた結果を示すだけではなく、その結果を詳細に考察、分析するなど、高度思考力を発揮した内容が多分に含まれていた。幅広い情報収集が行われており、日中計約180名にアンケート調査を行う等、

プロジェクト学習を通じた学生の
アクティブラーニングに対する意識調査分析

大規模な調査を行ったグループもあり、十分な見応えがあった。

しかしながら、プロジェクト実施過程において、大きく三つの問題に直面した。

一つ目は、平昌オリンピックに対する関心度が総じて低く、「興味がないテーマについて調べることが苦痛だ」「いやだ」「やりたくない」という声の一部の学生から上がったことである。開催まで後半年という時点で今一つ盛り上がり欠ける平昌オリンピックを盛り上げようという思いから本テーマを選んだが、プロジェクトに対する学生のモチベーションを上げるのに苦心した。

二つ目は、より重大な問題であるが、授業を欠席しがちな学生、積極的にグループの協働作業に参加しない学生、自分に課された役割を果たさない学生もいたため、グループによっては、うまく連携が取れない、役割分担ができない、という事態に陥ったことである。グループ内にこのような学生がいない場合でも、「一人でやった方が早い」「他の学生と相談する時間を取るのが面倒だ」という声が教員に寄せられ、グループ内の話し合いも不十分であったことから、クラス内発表会で最初から最後まで一人の学生がプレゼンを行うというグループも見られた。ルーブリック（自己評価）には「チームワークを大切に協働できたか」という項目があったが、1グループを除いてポイントが非常に低く、自由記述コメントからも、協働作業を面倒と感じる学生や苦手、難しいと感じる学生が多いことが読み取れた。

三つ目は、二つ目の問題と関連して、「協働」（collaboration）の意味が全学生にきちんと理解されていなかった（言い方を変えれば、教師による説明が不十分であった）ことである。ある2グループにおいては、グループ内で役割分担がきちんとなされ、メンバーは各自の担当箇所をきちんとこなしてはいたものの、一つのものを作り上げる、という意識に欠けており、各自持ち寄ったスライドをただつなぎ合わせただけの成果物は、一作品（発

表)としての統一感、整合性に欠けており、結果として完成度が低いものとなっていた。

4. アクティブラーニングとプロジェクト学習に関する意識調査

第3節で挙げた3つの問題は、実は北九州市立大学の中国語クラスのみならず、3大学3語学クラスに共通して生じた問題でもあった。そこで特に二つ目と三つ目の「協働作業」に関わる問題の原因や解決法を探るべく、すべての成果物を鑑賞、評価し終えた2018年1月に、全クラス共通でアクティブラーニング型授業とプロジェクト学習に関するアンケート調査を実施した。アクティブラーニングに関する調査は一部、ベネッセ教育総合研究所が2008年から4年ごとに実施している、全国の大学生を対象にした「大学生の学習・生活実態調査報告書」(第1回2008年、対象人数4070名、第2回2012年、対象人数4911名、第3回2016年、対象人数4948名)の内容を参考にした。本節では、主に韓国語クラスとドイツ語クラス(アンケート回答者計33名)の結果と比較しながら⁸、中国語クラス(アンケート回答者17名)の結果を考察する。

4.1 学習(受講)経験

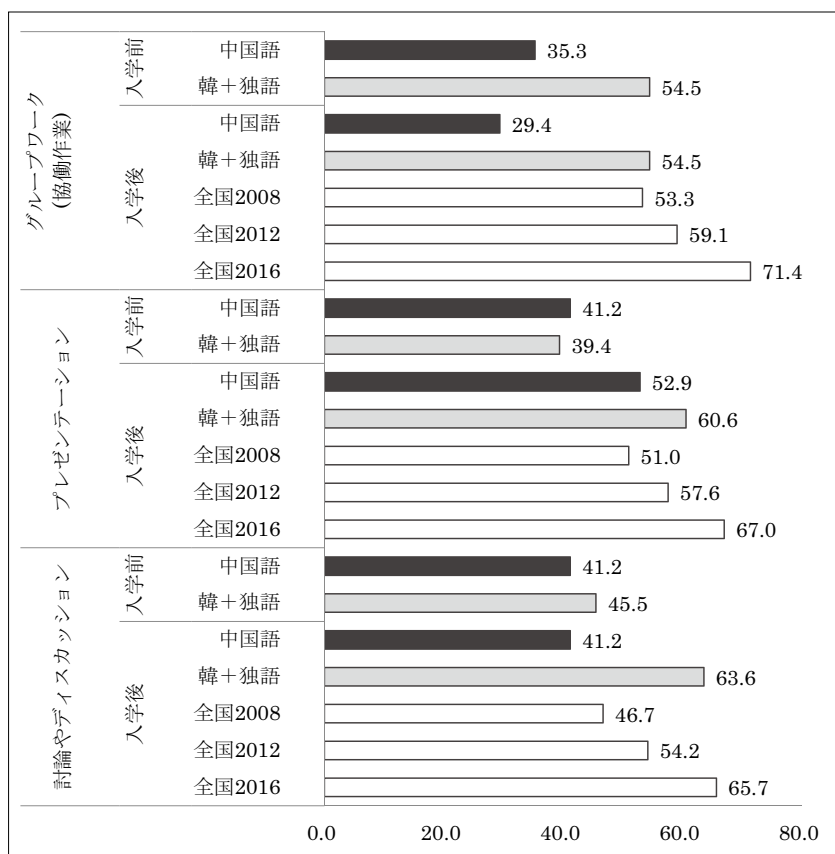
まず、大学入学前・入学後における、グループワークなどの協働作業、プレゼンテーション、討論やディスカッションの機会を取り入れた授業の経験有無について尋ねたところ、経験が「ある」と答えた割合は図1のとおりである(図中の数値はパーセンテージ。小数点第2位を四捨五入した。以下同様。「韓+独語」は連繫プロジェクトの他の2語学クラスの合計、「全

⁸ 他大学他語学クラスの状況については個別の結果を分析する立場にはないため、韓国語クラスとドイツ語クラスの結果を合わせて提示する。なお、韓国語クラス、ドイツ語クラスのデータは、池谷・阪堂・西(2018)をまとめる際、阪堂千津子氏、池谷尚美氏よりそれぞれ提供を受け共有したものである。

プロジェクト学習を通じた学生の
アクティブラーニングに対する意識調査分析

国2008」「全国2012」「全国2016」はそれぞれ、第1回、第2回、第3回「大学生の学習・生活実態調査報告書」の結果である)。なお、中国語クラス及び他の2語学クラスにおいて、本プロジェクトの対象となった授業科目で初めてこれらの活動を行った場合には、「ない」として分類している。

[図1] 学習(受講)経験



中国語クラスの学生は1年生で、大学入学後の授業経験が少ないということも関連するものの、調査の結果、大学入学前・入学後共に、グループワークなどの協働作業を取り入れた授業の学習経験が著しく低いことが明らかになった（入学前35.3%、入学後29.4%）。特に、大学入学後は、韓国語+ドイツ語クラスで54.5%、全国2016では71.4%の学生が協働作業を取り入れた授業の経験があると回答している中でこの結果は看過できないものである。

プレゼンテーションの機会を取り入れた授業は、大学入学前に41.2%の学生が経験し、大学入学後も半数を超えている（52.9%）ものの、韓国語+ドイツ語クラス（60.6%）や全国2016（67.0%）の結果よりは低く、本プロジェクトに参加した中国語クラスの学生のうち3分の2は今回のプロジェクトで初めて協働作業を行い、約半数は今回のプロジェクトで初めてプレゼンテーション（発表）に臨んだことになる。

討論やディスカッションも、半数以上の学生に授業での経験がないことから、中国語クラスの学生は、アクティブラーニング型授業の経験に乏しく、不慣れであることが明らかになった。

4.2 望む語学の授業形式とアクティブラーニング型授業について

次に、語学の授業の形式について、

- a. 教員が知識・技術を教える講義形式が多い。
- b. 学習者が主体となって取り組む活動が多い。
- c. 教員が知識・技術を教える講義形式と学習者が主体となって取り組む活動とがバランスよく混ざっている。
- d. その他（自由記述）

のいずれがよいか尋ねたところ、図2のような結果となった。

プロジェクト学習を通じた学生の
アクティブラーニングに対する意識調査分析

[図2] 語学に望む授業形式

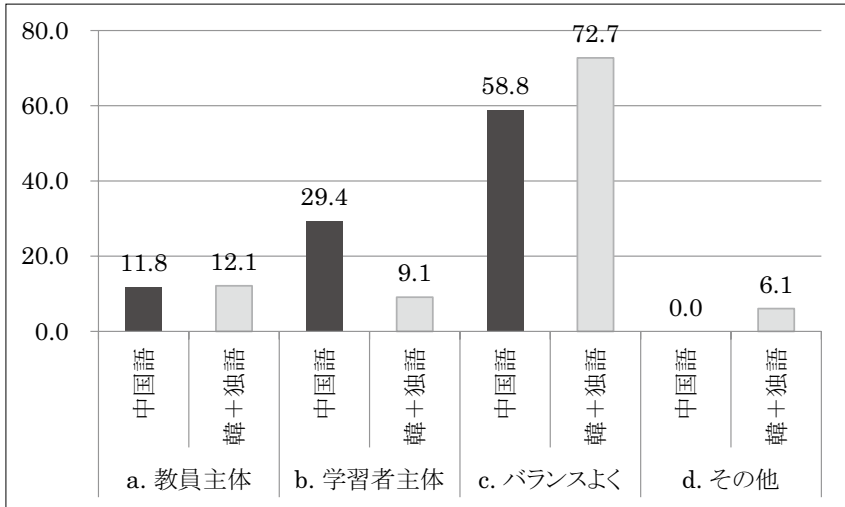
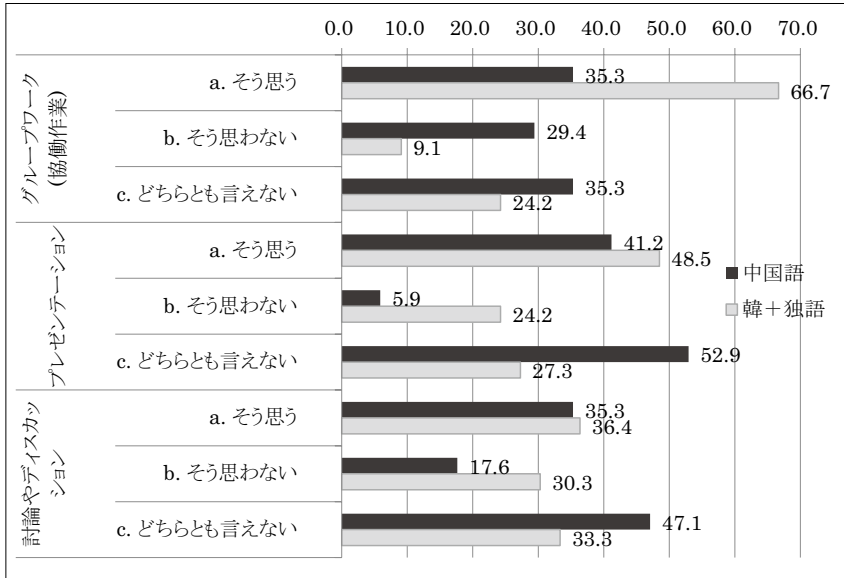


図2の結果から、語学の授業においても、従来型の講義形式を希望する学生が一定の割合で存在するものの（11.8%）、「c. 教員が知識・技術を教える講義形式と学習者が主体となって取り組む活動とがバランスよく混ざっている」授業を希望する割合が最も高く（58.8%）、「b. 学習者が主体となって取り組む活動が多い」授業を望む声も3割近くあることから、語学の授業に対して主体的に取り組もうという意欲を持つ学生が多いことが明らかとなった。

次に、語学学習の形式としてアクティブラーニング（グループワーク、プレゼンテーション、討論やディスカッションなど）は効果的だと思うかを尋ねた結果を図3に示す。

[図3] 語学学習にアクティブラーニングは効果的か



まず、全体的な傾向として、「どちらも言えない」の選択理由には否定的なコメントが大部分を占めていた。

グループワーク等の協働作業については、「そう思う」「どちらも言えない」がいずれも35.3%であったのに対し、韓国語+ドイツ語クラスで「そう思う」と回答した割合は66.7%で、大きな差異が見られた。中国語クラスの学生は、これまでの協働作業に対する経験の乏しさから、効果的か否かの判断が難しかったものと思われる。「そう思う」の選択理由として⁹、「他人の意見も聞くことで様々な情報が入ってくる」「みんなでしたほうが伸びると思う」「コミュニケーションを交えた言語学習の方が効率的」という積

⁹ 選択理由などの自由記述コメントは原文通りではなく、表現や文体、文字表記を書き改めたり、補足、削除した箇所がある。以下、同様。

プロジェクト学習を通じた学生の
アクティブラーニングに対する意識調査分析

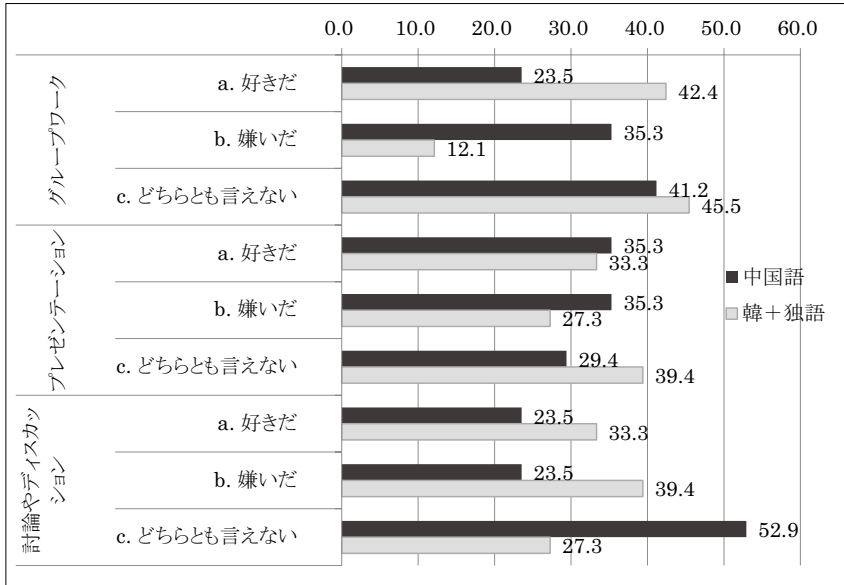
極的なコメントのほか、「1人だと自信がない」という消極的コメントも見られた。「そう思わない」の選択理由としては、「参加する人とそうでない人に絶対分かれる」「個々人の意欲に差があって、全員が良いものを得られるとは思わない」という協働のあり方に対する懐疑的コメントや、「お互いに至らない言語で会話しても意味がない」「グループになっても日本語でしか話さない」「同じ（初級）レベルの人たちとやって何が伸びるのがわからない」といった、初級レベルでの導入に対しては否定的なコメントが見られた。

プレゼンテーションについては、「どちらとも言えない」の割合が最も高く（52.9%）、「どういう効果があるかわからない」「文化の学習だと良いが、言語の学習には不必要だと思う」といったコメントが見られた。「そう思う」と答えた割合も低くはなく（41.2%）、「発音を向上させる良い機会だと思う」「その方が効率が良いし頭に入る」「言語以外の知識が増える」「パワーポイントをその言語で作成すると勉強になる」といった前向きなコメントが見られた。

討論やディスカッションについても、これまでの授業における経験の乏しさからか、「どちらとも言えない」と回答した割合が最も高く（47.1%）、選択理由として「たいして話せないときにやってもあまり意味がないが、3年生くらいでやるなら効果があると思う」「学習中の言語でやれば効果はあると思うが、日本語でやっても意味はほとんどないと思う」「経験がないのでよく分からない」といったコメントが見られた。「そう思う」と答えたコメントからも、ある程度、語学力がついた段階で、目標言語を用いて行うのは効果的だと考えている学生が多いことが分かる。

続いて、アクティブラーニング（グループワーク、プレゼンテーション、討論やディスカッションなど）の活動が好きかどうかを尋ねたところ、図4のような結果となった。

[図4] アクティブラーニングは好きか



グループワーク等の協働作業については、「どちらも言えない」の割合が最も高く（41.2%）、「嫌いだ」が続いた（35.3%）。「協力して他の人の意見などを集めることができる」「自分の意見を自由に述べるができる」「自分では思いつかない意見を聞ける」「他人と意見を共有できる」といった肯定的なコメントも見られた一方で、「1人でするほうがいい」「周りとか合わせるのが面倒くさい」「人と話すのが苦手」「皆で協力するのが苦手」「働く学生と働かない学生が出てきて不公平なことが多い」「メンバーによって話しやすかったり、そうでなかったりする」「仲が良い人となら積極的に協力できるが、そうでない人とは気まずい」といった否定的、消極的なコメントも多く見られた。

プレゼンテーション（自分たちの調べた内容を、スライドなどを用いて

プロジェクト学習を通じた学生の
アクティブラーニングに対する意識調査分析

発表すること)については回答が分散しており、「好きだ」と「嫌いだ」がいずれも35.3%、「どちらとも言えない」も29.4%であった。肯定的なコメントには、「みんなの反応を見るのが楽しい／好きだ」「調べるだけでなくアウトプットするのはとても大事だと思う」「自分たちが調べて作り上げたものを見てもらいたい」といったものが見られ、否定的なコメントには、「人前で発表するのが苦手」「緊張する」「調べるのは好きだが、発表は苦手だ」といったものが見られた。

討論やディスカッションについては、「どちらとも言えない」という回答が最も多く、半数以上を占めた(52.9%)。「自分の考えを言葉にするのは難しいが大切だ」「自由に意見を述べることができるし、反対意見も聞きたい」「自分の意見を口にすることで分かることもある」といった肯定的なコメントがあった一方で、「意見を聞くのは好きだが、言うのは好きではない」「調べるのは好きだが、発表は苦手」「自分の意見を言うのがあまり得意ではないので、ほとんど自分が納得させられる側になってしまう」「苦手だ」「感情的になってしまう」といった否定的、消極的コメントが多く見られた。

以下の表2、表3、表4はそれぞれ、図3(アクティブラーニングは効果的か)と図4(アクティブラーニングは好きか)の中国語クラスの結果(割合)をクロス集計したものである。

[表2] グループワークなどの協働作業に対する認識

	好きだ	どちらとも言えない	嫌いだ	合計
効果的だと思う	11.8	17.6	5.9	35.3
どちらとも言えない	0.0	17.6	17.6	35.2
効果的だと思わない	11.8	5.9	11.8	29.5
合計	23.6	41.1	35.3	100.0

グループワーク等の協働作業については、語学学習に効果的だと思うか

どうかということと、好きかどうかということに相関性は特に見られなかった。

[表3] プレゼンテーションに対する認識

	好きだ	どちらとも言えない	嫌いだ	合計
効果的だと思う	29.4	5.9	5.9	41.2
どちらとも言えない	5.9	23.5	23.5	52.9
効果的だと思わない	0.0	0.0	5.9	5.9
合計	35.3	29.4	35.3	100.0

プレゼンテーションについては、語学学習に効果的だと思うかどうかということと、好きかどうかということに一定の相関性が見られ、効果的だと思っている学生は好きだという回答が多く、効果的だと思うかどうかについて「どちらとも言えない」と回答した学生は、好きかどうかについても、「嫌いだ」または「どちらとも言えない」と回答する割合が高かった。

[表4] 討論やディスカッションに対する認識

	好きだ	どちらとも言えない	嫌いだ	合計
効果的だと思う	11.8	23.5	0.0	35.3
どちらとも言えない	5.9	23.5	17.6	47.0
効果的だと思わない	5.9	5.9	5.9	17.7
合計	23.6	52.9	23.5	100.0

討論やディスカッションについては、語学学習に効果的だと思うが、好きかどうかについては「どちらとも言えない」という回答と、効果的かどうか、好きかどうかについてはいずれも「どちらとも言えない」という回答が一定の割合を占めていた。

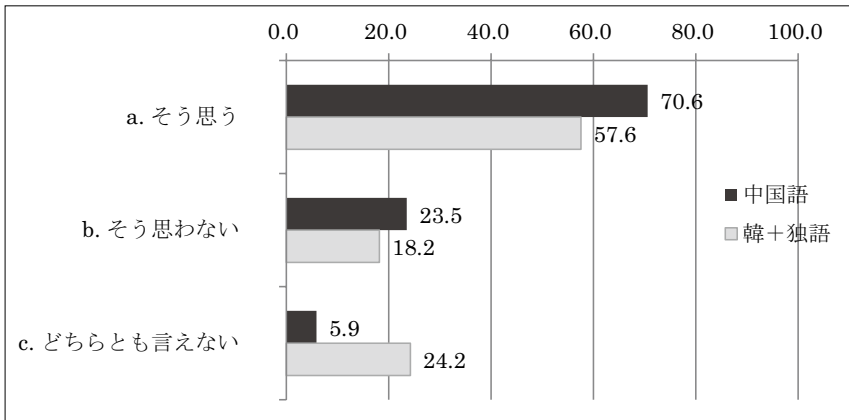
プロジェクト学習を通じた学生の
アクティブラーニングに対する意識調査分析

4.3 今回のプロジェクトと語学学習について

続いて、グループワークやプレゼンテーションを含んだ今回のプロジェクトについて、「語学学習」の一形態だと思うか、今回のプロジェクトを通じて履修中の語学の学習が進んだと感じるか、履修中の語学比以前よりも興味を持ち、もっと勉強してみたいと感じたか、その他の語学以前よりも興味、関心を持ったか、今回のプロジェクトは大学生たるにふさわしい高度な思考力と協働力を生かした知的な活動だと思うかについてそれぞれ問うた。

まず、今回のプロジェクトを「語学学習」の一形態だと思うか、については、図5のような結果となった。

〔図5〕 今回のプロジェクトは「語学学習」の一形態だと思うか

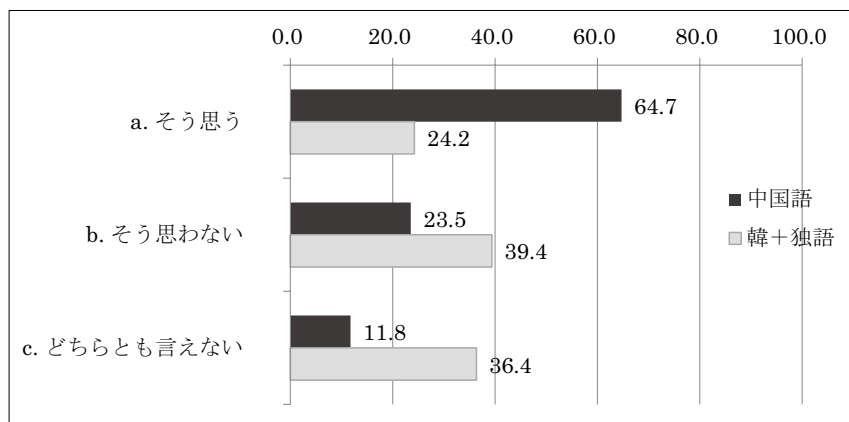


「そう思う」が70.6%を占め、この割合は韓国語+ドイツ語クラス (57.6%) よりも13ポイントも高かった。中国語クラスでは、中国語を用いたアンケート調査や、中国語の文献、ウェブサイトなどを利用した情報収集などが中心であり、また、成果物としてのスライドにも必ず中国語訳を付ける必要

があったため、他の言語クラスよりも「語学学習」の一形態として認識された割合が高かったものと推測される。「語学への興味が高まった」「語学に関係している」「自分の興味と語学を結びつけることによってより意欲的に学べたと思う」「プレゼンの準備の段階で中国語をたくさん使った」「自分たちで実際に中国語を調べることで、色々な単語を知ることができた」といったコメントがみられた。一方、「そう思わない」という回答も一定の割合（23.5%）を占めており、この割合は韓国語+ドイツ語クラス（18.2%）よりもやや高かった。その理由として、「日本語で発表したから」というコメントが見られたが、これは、韓国語クラスでは、発表（プレゼンテーション）時に韓国語を用いる割合が高かったのに対し、中国語クラスではほぼ日本語だけで発表を行ったことが関係すると思われる。

次に、今回のプロジェクトを通じて、履修中の語学の学習が進んだと感じるかについての回答結果は図6のようになった。

[図6] 今回のプロジェクトを通じて履修中の語学の学習が進んだと感じるか

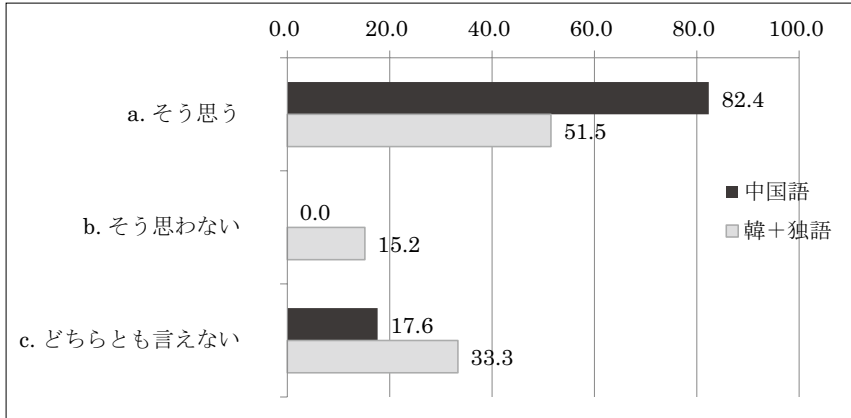


プロジェクト学習を通じた学生の
アクティブラーニングに対する意識調査分析

図5の結果では、今回のプロジェクトは「語学学習の一形態」であるという認識が中国語クラスで強く見られたが、それと関連して、学習が進んだと感じた割合（64.7%）も高くなったものと推測される。韓国語+ドイツ語クラスでは「そう思う」の割合が24.2%にとどまっていることとは対照的な結果となった。中国語クラスの学生が「そう思う」を選択した理由として、「日常会話とはまた違う単語や表現を知ることができた」「語彙が増えた」「習っていない文法を教えていただいた」「中国語のサイトで調べた」といったものが見られた。今回のプロジェクトは「語学学習の一形態」であるとは思わないと回答した学生は、本項目においても「そう思わない」を選択していた。初級レベルの学習者ということもあり、中国語での調査やスライドの日中対訳は学生にとって難易度が高いと感じられたことが考えられ、「今の中国語能力では日本語を中国語に訳すのは自力ではほぼできなかった」というコメントも見られた。

次に、今回のプロジェクトを通じて、履修中の語学に以前よりも興味を持ち、もっと勉強してみたいと思ったか、という項目については、図7のような結果となった。

[図7] 履修中の語学に以前よりも興味を持ち、もっと勉強してみたいと思ったか

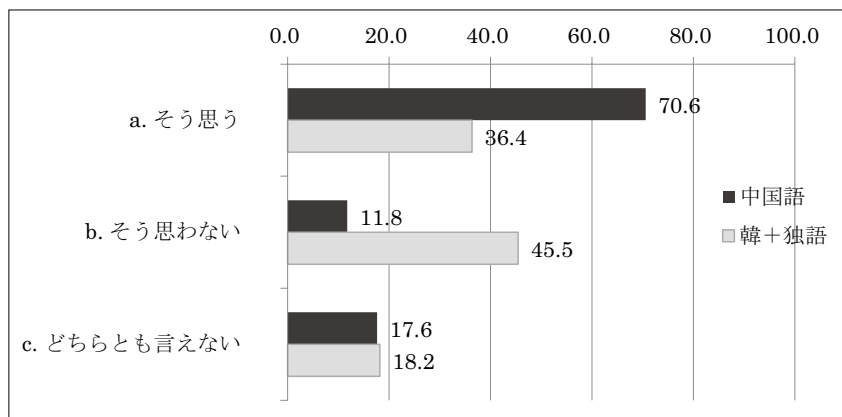


中国語クラスでは、本項目においても「そう思う」の割合が最も高く(82.4%)、8割以上の学生が、中国語に対する興味や学習意欲が向上したと回答しており、韓国語+ドイツ語クラスよりも30.9ポイントも高かった。また、「そう思わない」という回答は0%であった。もともと中国語が好きでその気持ちは変わっていない、というコメントも見られたが、「少しでも中国語が分かるようになった」「自分の興味と語学を結びつけることによってより意欲的に学べた」「今回のプロジェクトが楽しかった」「わからない表現があって悔しかった。もっと自分の言いたいことをはっきりと表現できるようになりたい」といったコメントが多く、大多数の学生が、難しいながらも本プロジェクトに挑戦したことで何らかの達成感を味わい、それが今後の中国語学習に対する意欲につながったことがうかがわれる。

さらに、今回のプロジェクトを通じて、現在履修している語学以外の語学に以前よりも興味、関心を持ったかと問うたところ、図8のような結果となった。

プロジェクト学習を通じた学生の
アクティブラーニングに対する意識調査分析

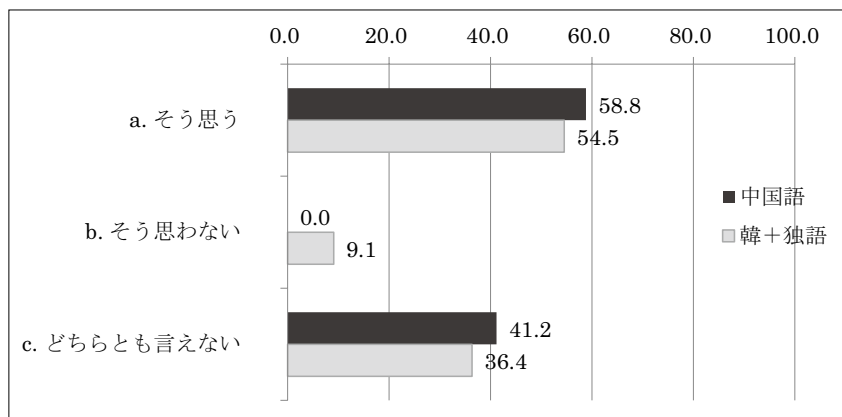
[図8] その他の語学に以前よりも興味、関心を持ったか



中国語クラスでは、中国語に対する興味、関心の高まりが他の言語（主に韓国語、ドイツ語）に対する興味、関心をも引き起こしたのか、「そう思う」の割合が70.6%と高かったのに対し、韓国語+ドイツ語クラスでは「そう思わない」が最も多く（45.5%）、「そう思う」は36.4%にとどまった。中国語クラスでは、自分たちの発表後に、韓国語クラスの発表の様子を撮影したビデオや、ドイツ語クラスの作成したスライドを見て大いに刺激を受けたとみられ、「韓国語は響きがかっこいい」「韓国語をもっとちゃんと学びたい」「ドイツ語を読めるようになりたい」「他の言語も勉強してみたい」「（他の言語や国の状況について）少しでもわかるようになったのはうれしい」というコメントが多く見られた。

続いて、今回のプロジェクトは大学生たるにふさわしい高度な思考力と協働力を生かした知的な活動だと思うか、という質問項目については、図9のような結果となった。

[図9] 今回のプロジェクトは高度な思考力と協働力をを用いた知的な活動だと思うか



中国語クラスでは「そう思う」の割合が最も高く（58.8%）、「そうなるように意識した」「結果を調べるだけでなく、考察までした」というコメントが見られたが、「どちらとも言えない」という割合も高く（41.2%）、「努力に個人差がある」「グループによる」「評価では『大学生らしい発表』と高く評価されたが、自分自身は高校の時とあまり差が感じられなかった」といったコメントが見られた。これらのコメントからも、「協働力」「高度思考力」に課題があることがうかがわれる。また、大学入学前の学習経験の有無も多少なりとも本プロジェクトの活動に影響を与えたとみられる。

最後に、今回のプロジェクトを通して、どのような気づきを得られたか（自由記述）という問いに対しては、

- ・ 日本のサイトで調べると日本人的目線が含まれるが、中国のサイトだと中国人的目線が含まれるかもしれない。
- ・ ふだんの授業で「中国人（の考え）」について学ぶことはないので、知ることができる良い機会だった。
- ・ 日中を比較する形だったので、文化（考え方）の違いを知ることができた。

プロジェクト学習を通じた学生の
アクティブラーニングに対する意識調査分析

- ・ 中国人と日本人の意識の差が大きく、また、日本人は消極的、中国人は積極的だと思った。
 - ・ 調査の結果には日中それぞれの国民性が感じられた。
- といった、人や国、文化の違いなどについての気づきのほか、
- ・ 高校まではスライド作成は調べた情報を載せるだけだったが、考察までしたのは大学生らしいと思った。
 - ・ 最後に作ったスライド（PowerPoint）は中学生の時だったが、その時と同じような内容ではなく、高度な考察や表現の仕方が必要だと思った。
 - ・ 調査結果が予想と違ったものになっても、詳細に考察することで、それには必ず理由（意味）があると気づいた。

といった、高度思考力に対する気づきが見られた。さらに、

- ・ 何か一つのことについて調べることにより、その分野の中国語をたくさん知ることができたのは大きかった。
- ・ 自分が言いたい言葉を中国語訳するのは語学学習において効果的だと思った。
- ・ 興味あるものに結びつけながら中国語を勉強するのはとてもよい作業だと感じた。

など、語学学習に関する気づきも見られた。その他、

- ・ 母語以外の言語で自分の言いたいことを表現するのがまず難しく、他大学のレベルの高さをひしひしと感じた。
- ・ 協調の難しさと面倒さに気づいた。
- ・ メンバーと連携をとって一つのプレゼンをする苦労がわかった。
- ・ アンケートによるデータ収集など、より良いプレゼンにするには時間と労力も必要だということがわかった。

といった、「困難」に対する気づきもあった。

5. まとめと今後の課題

意識調査の結果から、今回のプロジェクトに参加した北九州市立大学中国語クラスには大きく次の特徴があることが分かった。

- 1) 語学の授業に対して主体的に取り組もうという意欲を持つ学生が多い。
- 2) アクティブラーニングの機会を取り入れた授業経験に乏しい。特にグループワークなどの協働作業の経験は他大学に比べて著しく少ない。
- 3) アクティブラーニング（グループワーク、プレゼンテーション、討論やディスカッションなど）について苦手意識、負担感、拒否感を持つ学生が少なくない。
- 4) KitaQプロジェクト2017を「語学学習の一形態」と認識し、プロジェクトを通じて語学学習が進んだと感じた学生が多い中で、「語学学習の一形態」と認識しなかった学生も一定の割合で存在し（23.5%）¹⁰、語学学習と認識しなかった学生は当然のことながら、「本プロジェクトを通して学習が進んだ」とは感じていない。
- 5) KitaQプロジェクト2017を通じて、中国語やその他の語学に対する興味、関心が高まった学生が多い。

『めやす』においては、「21世紀型スキル」の一つとして「協働力」が掲げられている。「協働力」は「自分と違う考え方、価値観、感性をもつ多様な他者と協力して作業できる力」と定義され、「21世紀に問われるグループ学習は、グループ内の協調性や社会性よりも、むしろ自分と異なる考え方、

¹⁰ 通常授業で行う各課のふりかえりの際、ふりかえりシート自由記述欄に「プロジェクトが終わったので、ようやく中国語の勉強ができる」と書いた学生がいたことから明らかである。プロジェクト学習を「語学の一形態」と認識しなかったのは、「語学とは文法や語彙を習い、発音練習をするもの」という強い固定観念があるからではないかと思われる。

プロジェクト学習を通じた学生の
アクティブラーニングに対する意識調査分析

価値観、感性をもつメンバーから構成されるグループにおいて、他者と切磋琢磨して作業できる力」とされる。『めやす』が掲げる具体的な「協働力」は以下の4点である。

1. 目標達成のための作業に、グループの一員として参加できる。〈参加〉
2. 自分に与えられた作業を、決められた時間内に責任をもってやり遂げることができる。〈信頼性〉
3. グループ内の話しあいで、メンバーの意見を聞くとともに、自分の意見も言い、全体の結論を出すために貢献することができる。〈ディスカッション能力〉
4. 目標達成のために自分の能力、知識、時間などを提供し、メンバーを助けたり、妥協したりして、前向きに協働作業をすることができる。〈グループワーク〉

メンバーには、協働作業の過程において生じるさまざまな困難や葛藤を乗り越え、ある一つの目標を実現しようとする強い意志や、他者の意見を受け入れる柔軟性、妥協点を見出したり、互いに理解、許容しようとしたりする努力が求められる。これらは異なる文化背景を持つ人びとと接する時に必要となる要素に他ならず、専門的に外国語を学んでいる学生たちにとってとりわけ重要である。

全国的に見れば、アクティブラーニング型授業を行う授業は増加傾向にあるものの、その流れとは逆行するかのように受け身志向の大学生が増えており¹¹、自らが主体的、能動的にかかわっていく必要のある活動に対して強い苦手意識、負担感、嫌悪感を抱く学生が一定の割合で存在することが

¹¹ ベネッセ教育総合研究所(2017)は、近年の大学生の大学教育観について、「大学での学習の方法は、大学の授業で指導をうけるのがよい」「学生生活については、大学の教員が指導・支援するほうがよい」「学生が知識や技能を身につけられるかどうかは、大学の教育の責任だ」など、大学や教員に指導や支援を求める意見が増加傾向にあることを指摘している。

指摘されている¹²。

今後の課題として、「協働」とは何かを学生が理解できるように説明したうえで、通常の授業において、「協働作業」の有効性や有益性を感じられるような（成功体験の）機会を増やして、「協働作業」に対する苦手意識、負担感等を克服できるように授業内容を工夫する必要がある。

最後に、毎年度、大学入学後間もない段階で中国語クラス1年生を対象に実施しているアンケート結果を見ると、学生の中国語の選択理由は、「就職に有利ときたから」「高校の先生／親から勧められたから」といった外発的動機づけによるものが目立ち、「特に興味なし」「なんとなく」といった回答も年々増加の傾向にある¹³。目指す中国語のレベルについても、平成29（2017）年度は「仕事で使えるレベル」「人に教えられるレベル」などと回答した学生は2割にも満たず、約半数は「日常会話程度」「コミュニケーションが可能なレベル」と回答しており、少なくとも入学時点では、中国語に対する学習意欲や中国語圏の人や事柄に対する興味、関心はさほど高くなかったことがうかがわれる。しかし、今回の調査結果（図7）では、中国語に以前よりも興味を持ち、もっと勉強してみたいと思ったという回答が8割を超えており、自由記述コメントからも、中国という国や文化（人々の考えや価値観）に対して関心を寄せ、より意欲的に学習しようと思う学生が増えたことが分かる。この点は本プロジェクトを実施した中での大きな収穫である。

¹² 近田・杉野（2015）や赤堀（2017）など。

¹³ 2007年に北九州市立大学外国語学部中国学科・中国語専攻の学生計159名に調査を行った祁勝（2008）の結果によると、「中国の文学や歴史、中国語に興味があるから」「中国のテレビ、映画、漫画、歌などが好きだから」といった統合的動機づけの割合が最も高かったものの42.2%にとどまり、現在はこの割合はさらに低下しているとみられる。

プロジェクト学習を通じた学生の
アクティブラーニングに対する意識調査分析

参考文献

- 赤堀侃司 (2017) 「アクティブ・ラーニングに関する意識調査と分析」『(教育テスト研究センター (CRET) 年報) 第2号, pp.8-18
- ベネッセ教育総合研究所 (2017) 「第3回大学生の学習・生活実態調査報告書速報版 [2016年]」 (2018年1月31日閲覧)
http://berd.benesse.jp/up_images/research/3_daigaku-gakushu-seikatsu_all.pdf
- 邴勝 (2008) 「学習動機づけに関する調査研究—北九州市立大学の中国語専攻生を対象に一」『北九州市立大学外国語学部紀要』第121号, pp. 53-61
- 近田政博・杉野竜美 (2015) 「アクティブラーニング型授業に対する大学生の認識—神戸大学での調査結果から—」『大学教育研究 (神戸大学大学教育推進機構)』第23号, pp.1-19
- 阪堂千津子・西香織・池谷尚美 (2016) 「『街角外国語ワード・ウォッチング』プロジェクト紹介」外国語授業実践フォーラム第11回会合・福岡韓国朝鮮語教育研究会1月度研究会・中国語教育学会第5回研究会合同会合 (九州産業大学、2016年1月10日)、口頭発表
- 池谷尚美・阪堂千津子・西香織 (2018) 「平昌オリンピックで目標言語圏の選手を応援しよう! ~韓・中・独3言語プロジェクト~」言語教育エキスポ2018 (早稲田大学、2018年3月4日)、口頭発表、予稿集pp.62-63
- 公益財団法人国際文化フォーラム (2013) 『外国語学習のめやす—高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』ココ出版
- 西香織・阪堂千津子・池谷尚美 (2015) 「中・韓・独 音楽比較プロジェクト」言語教育エキスポ2015 (早稲田大学、2015年3月15日)、口頭発表、予稿集 pp.115-116
- 西香織・胡敏男 (2015) 「中国語授業リノベーション—一日中楽曲調査プロジェクト」中国語教育学会・福岡韓国朝鮮語教育研究会合同大会 (九州産業大

学、2015年1月11日)、口頭発表

西香織(2015)「语言文化学习交流项目介绍 以中日歌曲介绍为例」CLEF(the Chinese Language Education Forum) 2015: World Readiness in PreK-16 Chinese Language Instruction (アメリカ、サンフランシスコThe Hotel Sofitel San Francisco Bay、2015年4月11日)、口頭発表

